

# Childhood Studies (学際的「子ども期」研究) への接近 —子ども・子ども期をめぐる近代的パラダイムの超克—

首藤 美香子・須川 公央

## 研究実績の概要

2017年度は、1990年代以降、英米で展開されている学際的な「子ども期」研究 (Childhood Studies) において、我々が自明とする子ども理解の理論と方法が、西欧近代の極めて特異な条件のなかで構築された社会文化的産物であるとみなされ、そのパラダイム＝認識枠組みの相対化が試みられていることに注目し、最新の動向を追った。その結果、CSでは、生物として実在する「子ども」と「子ども期」は分けて考えるべきとされ、後者は人間・モノ・科学技術・情報・表象・言説などの異種が混淆しながら絶えず複雑に生成変化し、複数の形態と性質を有する“Childhoods”と表記されるのが一般的であり、「子ども期」の多義性、可変性、多様性を示す証左となっていたことがわかった。その背景には、「子ども」研究の主流をなしてきた発達心理学の「実証主義」、「発達主義」、「本質主義」に対する懐疑があった。また、子どもの養育・保護・教育に関する制度政策の設計において考慮される、子どもの「ニーズ」、「最善の利益」、「ウェルビーイング」が、先進諸国の中間層の子どもを基準に抽出された標準形や理想像を前提にしたもので、そこには大人と子どもの力関係の「本来的な歪み」が反映されているとの指摘もなされていた。一方で、近年、乳幼児期研究の進展により、子どもの「自律的」で「有能な学習者」としての側面に注目が集まり、「大人と子どもの二分法」が崩れることは、子どもの「主体性」の再評価と「権利者」として子ども観の確立に参与してきたといえるが、その「自己責任で問題解決できる子ども」という言説が新たな「子ども神

話」を形成させる危険性もあるとの懸念もされていた。以上、CSを概観することで、「大人期」と「子ども期」は異なるとして社会の「周縁」に隔離しようとしてきた近代の構図は綻びつつあり、子どもを社会の「中心」へと押し戻す圧力がかかり、子どもの世界と大人の世界が融合と分離に引き裂かれる現状を認識できた点で有意義であったといえる。